

元田永孚の秩序像と「英雄豪傑」論

洪信慧

横井小楠の弟子であり、のちに明治天皇の侍講を務めたことで知られる元田永孚に、単なる朱子学という枠に収まらない独自の思考が認められることは、すでに指摘されている。確かに後期水戸学の影響も考慮されうるが、それ以上に注目すべきは、彼の秩序像に江戸期の職分論的思考を明治の時代状況に適応させる試みが見られる点である。元田が理想とした社会とは、君主を頂点とし、臣民が各々の職分を尽くすことで秩序が保たれる体制であった。このような秩序構想において「各得其所」の理念は、単なる朱子学の道徳的理想にとどまらず、儒学的秩序原理と職分論の接点として理解されるべきものであり、江戸儒学の思想的系譜の中に位置づけられる。また、こうした政治的秩序観は元田の「世ノ英雄豪傑」に対する批判とも深く関わっており、時局的課題とも接続する問題意識を映し出している。元田が自由民権運動に批判的であったことは広く知られているが、彼にとって民権論者とは、江戸末期の志士などの「英雄豪傑」を志した者たちに連なる存在であった。元田は、「英雄豪傑」を自任する人々は「眼力」が低く、事業を完遂できない者であると批判する。

本発表では、まず元田永孚における秩序像の核心を「各得其所」の理念に見出し、それが職分論的思考と結びついていたことを明らかにする。さらに、そうした秩序像から、「英雄豪傑」的行動を危険視し、民権論や文明論に対して批判的な立場をとった彼の政治思想の構造を分析する。元田にとって儒学とは、抽象的な理念ではなく、王政復古後の社会において有効性を持つ普遍的かつ実践的な思想であり、その体现者は私欲を抑えて公に尽くす君子であった。本発表は、元田永孚の秩序像を起点とし、それに接続する「英雄豪傑」論の意義を考察することを通じて、彼の思想における「君主専制」や民の政治参加の問題に対して新たな視座を提示することを目的とする。